

研究主題について

研究部

1. はじめに

本校では、昭和63年から平成2年までの3年間、「個が生きる授業」を研究テーマとして、授業のあるべき姿を追い求めてきた。その成果を、平成2年度研究紀要に著すとともに、平成3年6月にまとめの研究会を行った。その後、約1カ月の検討期間を持って、「個が生きる授業」に続くテーマはどうあればよいかを探った。その結果、「個が生きる授業の評価」とすることになったわけである。これから、なぜ「評価」を重視したかについて記す。

2. 主題設定の理由

(1) 評価の対象

これまでの授業研究を振り返ってみたとき、次のようなことが指摘された。それは、子どもが活動をして、何を見つけ、何がわかり、何ができるようになったかという、活動の結果だけでなく、活動そのものに意義を見取るような評価の見直しをしていく必要があるということである。

このことを、平成3年9月に行った授業研究での具体例を取り上げて述べてみよう。

理科の授業で、A、B2種類の食塩水のどちらが濃いか調べる実験をしたとき、ある班は、はじめ、ろ紙で食塩をろかして調べようとしたが、何も残らなかった。それで、しばらく困っていたが、このままではどちらの食塩水が濃いか決められないと判断して、ほかの方法を考えた結果、今度はろ紙の重さをうわ皿でんびんで測って調べ始めた。そのため時間が足りなくて、結果の発表をするときに、「まだ途中です」と言う発表になった。

このグループは、初めに考えた実験方法ではどちらが濃いかうまく判定できないことに気づくとともに、それまでの実験方法にさらに工夫を加えて新たな実験方法をあみだし、実験をするという活動をしたことになる。そのような一連の主体的な活動を見て、児童の考え方が理科的にどのように深まり広がっていったかを評価することが大切である。つまり、何を評価するかという、評価の対象についての問題提起があったわけである。

この例から考えられるように、学習活動そのものをもっと評価していくようにしたいというのが、評価に着目した第1の理由である。

(2) 評価の視点

次に、授業を通して、子どもたちに何を育成すべきであるかを検討し、教科のねらう学力、とりわけ意欲、態度、能力などの育成をめざした評価がなされているか見直すべきであるとの指摘がなされた。

例えば、3年で、「 $102 \div 6$ のしかたを考えてみよう」といって、各自に答えの求め方を考えさせたときのことである。何人かが発表したところで、ある子が挙手して、「 $102 \div 6$ と $51 \div 3$ は、同じ答えになる」といったので、どうしてそうなるのかたずねたところ、そのわけをうまくいえないでいる。ほかの子どもも、その子の言っていることの意味がよくのみこめないでいる。この子の発表は、このあと進めようとしている筆算の学習に直接結び付くものではない。しかし、わり算について、鋭い直観を働かせているといえる。この見方は、これから少数のわり算や分数の学習をするときに、考え方の基になる見方をしているといえてよい。それを、今の学習に関係ないからといって

見過ごしてしまうのではなく、その発想のすばらしさを評価することが意欲や能力などの学力を育成することになるととらえるのである。

評価を重視した第1の理由が評価の対象を問題としたのに対し、第2の理由は、その対象を見る視点、即ち評価の観点を問題としたのである。

これまで、知識、理解面からだけ評価してきたわけではないが、これからは、めざす学力を念頭においた評価、即ち、知識、理解だけでなく、意欲、態度、能力を育成するという観点からの評価をもっと取り入れるべきであると言う反省が提起されたわけである。これが、評価に着目した第2の理由である。

子どもの言っていること、していることの中に、教科のねらう学力の育成につながることを見いだして評価するということが、このことは、子どもが今まさに伸びようとしている方向を的確につかみ、その方向に向かう飛躍を支援するという意味において、教師の指導性と子どもの主体性との止揚を意味する。そのような評価をめざしたいということでもある。

(3) 基盤となる評価観

評価を重視した第1の理由、第2の理由をまとめると、次のようにいえよう。「教師のもつ基準に子どもを合わせるのではなく、子どもに内在する価値を引き出し、育てていく、そういう視点から授業を見直すために評価を重視する」、このようにまとめることができよう。

したがって、学習指導案の中に用意されている、教師の側からみた観点別評価基準だけでは、対応しきれない場合が生じると考えられる。その場合、子どもの側からみた個に応じた評価が必要になってくる。授業の中の思いがけない発表、反応の意味を鋭敏な感覚でとらえ、共感的に理解し、手だてを施すことができる評価観、授業観をもつ必要がある。もちろん、そのことは、従来の観点別評価基準を否定するものではない。教師の側からみた客観的な観点別評価基準とともに、個に応じた観点別評価がこれからは特に重視されなければならないということである。

評価が子どもの活動の本質を見抜いたものであって、適切な指導につながるものであるほど、より質の高い「個が生きる授業」の具現化が可能となる。その基盤となる評価観、授業観について、実践を通して研鑽を深め、評価と指導の一体化をめざす必要がある。

このような理由から、「個が生きる授業の評価」を、本年度のテーマとしたわけである。

3. 「学習活動」の重視

本年度の研究テーマを模索する過程において、「評価」ということのほかに重視したいことが、もう1点うきぼりにされた。それは、「学習活動の重視」ということである。

子どもの活動の結果だけでなく、活動そのものにも意味を見いだすような評価観を持ちたいという反省は、子どもの主体的な活動そのものも、より充実させたいという気持ちを強く起こさせたのである。

前年度まで、個が生きる授業に迫るため、問題解決的な学習過程を踏まえた授業を構想してきた。そして、各学習段階における個が生きるための手だてを次のように考えて授業作りに取り組んできた。

学習課題の把握の段階 …………… 子どもに合わせた学習課題の選定をする。
課題解決の見通しを持つ段階 …… 学習課題解決の方法の確認とその解決の見通しを一人一人の子どもが持てるようにすること。

学習課題解決の段階 …………… 多様な学習活動を用意する。

学習活動のまとめの段階 …………… 個と全体の学習結果のまとめを適切に行う。

これをさらに深めていくために、個が生きる授業の最も根本であるところの、「児童の主体的な活動」に焦点を合わせ、研究を進めたいというわけである。

考えてみれば、「主体的な活動を充実させること」と、「その活動そのものに意義を見いだそうとする評価」とは、車の両輪であるともいえよう。学習活動の重視は、当然の帰結とも思われる。

そこで、児童の主体的な活動としてめざす姿を、文部省発行「初等教育資料」を参考にして、次のように具体化した。

「児童がその子なりの考えを持ち、よりよい方向をめざして進んで考え、判断し、表現する（行動する）ことを重視した学習活動」

このような学習活動を具現化していきたいというのが、私たちの願望なのである。

この学習活動重視の気持ちは、「個が生きる授業の評価」という表現の中にははっきりとは現れていないが、評価と同様に大切にしたいと私たちが心に銘記していることなのである。

この度の教育課程の改訂に当たって、児童自ら考え、自ら学ぶ教育への質的な転換を図ることが強調されているが、そのことと、「主体的な学習活動と評価の重視」とは、方向をひとつにするものであると考える。

本年度の研究のテーマ「個が生きる授業の評価」は、以上のような背景をもって平成3年7月に設定され、実践、研究に入ったのである。

4. 研究テーマ設定後の経過

これからは、研究テーマ「個が生きる授業の評価」が設定されてから後の歩みについて、概要を記すことにする。

(1) 夏期研修会

8月29日に研修会を持ち、研究テーマの受けとめ方について各教科部会・障害児教育部会で話し合ったものを持ちより、検討しあった。その研修会で次のようなことが確認され、「評価」についてのとらえ方がより一層明らかになった。

- ・評価は、授業の進行中の評価を中心とすること。
- ・評価をするのは、教師がする場合もあるし、子どもの場合もあること。
- ・私たちがめざすのは、指導と評価の一体化したものであること。
- ・あらゆる機会を通して評価すること

また、各教科教育や障害児教育のねらう学力についてもそれぞれの考えを出し合って意見交換をし、能力や態度を養うことの大切さを話し合った。

さらに、この日は、広島大学学校教育学部教授、高橋超先生をお招きし、「個が生きることと評価」と題した1時間の講演を拝聴した。その講演から、個が生きるための自己過程として、自分の姿に注目する自己焦点化、自分の姿を把握する自己像形成、自己の姿を評価する自己評価、自己の姿の表出の4段階があり、特に自己評価の段階が大切であることを学んだ。なお、（個が生きる授業を実現するために）と題した高橋超先生の論説が、本校出版の「初等教育53号」に掲載されているので、参照されたい。

(2) 授業研究

次に、9月には、障害児教育と理科教育について、授業研究を行い、授業を通してテーマについての共通確認を行った。

その授業研究をする際の研究の視点を、研究部として、次のようにまとめた。

「児童がその子なりの考えを持ち、よりよい方向めざして進んで考え、判断し、表現する（行動する）ことを重視した学習活動」を具現化し、「意欲、態度、能力の面から子どもの変容を読み取る」実践と理論を深める。そのため、次の視点に重点を置く。

- ①教科がねらう学力の育成にむすびつく学習活動であったか。

②学習活動に対応した評価であったか。

③評価が子どもの学習活動に生きたか。

このような観点による授業研究を通して、得られた成果のうち、主なものは次の通りである。

障害児学級での授業研究

- ・個に応じた評価の大切さを、具体的な場面を通して再確認した。
- ・一人一人に対する評価と、全体の動きに対する評価の、両面に着目することの大切さを、具体的な場面を通して再確認した。
- ・評価の多様なあり方を確認した。
- ・最近接課題を捉えた評価の観点と、チームティーチングによる的確な評価のあり方を学んだ。

理科授業研究

- ・科学的な思考を育てることにつながる学習活動の具体例が明らかになった。
- ・望ましい態度を育てることに結び付く評価の具体例が明らかになった。
- ・自己評価尺度の適切な設定について考察した。
- ・自己評価の目的について考察した。

(3) 教科別授業研究

10月は、各教科毎に小グループの授業研究を行ってテーマに迫ることにした。そして、その情報交換のための会議を11月にもった。

その際、注目されたのは、自己評価に着目した教科が多かったということである。自己評価力の育成に向けて実践を開始した教科もあった。

また、学習指導案の形式を変える試みも提案された。

(4) 校内研修会

7月以来、各教科部会・障害児教育部会を研究母体として実践、研究を行っては、全体会議の場で研修し合ってきたが、一層の飛躍を目指して、12月4日に、本校OBや大学教官を招いて、校内研修会を行った。

その第1のねらいは、授業の中の具体的な子どもの姿や、評価の場面、あるいは、評価すべきであった場面などをもとに、評価のあり方を追究し、評価観を磨きたいということである。

第2のねらいは、教材解釈力、児童理解、指導技術、授業の構成力、などの授業力を高めるということである。

深い理論研究をなさっている大学の先生方や、経験豊富なOBの先生方の御指導や御助言を頂ながら、より質の高い研修を行いたいと考えたのである。

5. おわりに

以上、遅々とした歩みではあるが、1歩1歩前進を続けているところである。各教科部会・障害児教育部会ごとに集まって、各自の課題や成果を出し合い、共通確認すべきことを明らかにしながら、教官各自の個性を生かした実践研究を続けてきた。その主旨に沿って、本研究紀要も、教官各自の個人執筆とした。各部の基本的な考えを踏まえて執筆しているが、それについて詳しくは、本校出版の「初等教育53号」をご覧下されれば幸いである。

これから、「児童がその子なりの考えを持ち、よりよい方向めざして進んで考え、判断し、表現する（行動する）ことを重視した学習活動」を具現化し、「意欲、態度、能力の面から子どもの変容を評価する」実践を、一層深めていくことをめざしている。そして、その実践を基に、理論化していきたいと考えている。